

海外姉妹都市訪問川越市中学生交流団
派遣生アンケート調査報告書



アメリカ・セーレム



フランス・オータン



ドイツ・オフエンバッハ

令和3年（2021年）6月

川越市・川越市姉妹都市交流委員会

はじめに

本市の海外姉妹都市への中学生交流団派遣事業は、昭和 62 年の開始以来 30 年以上が経過し、これまで 500 名を超える中学生が海外姉妹都市交流を経験してきました。この報告書は、中学生での派遣経験がその後の生活にどのような変化をもたらしたかを調査したものです。

過去の記憶をたどり、アンケートにご回答いただきました派遣生の皆さまには深く感謝申し上げます。回答欄いっぱいに書かれた派遣生の熱い思いに触れ、本事業の意義や目的を再確認するとともに、姉妹都市交流事業の推進に向けての大きな励みとなりました。

本報告書が今後の姉妹都市交流及び国際交流の発展につながるものとなれば幸いです。

令和 3 年 6 月

川越市・川越市姉妹都市交流委員会

目 次

1 調査概要	P 2
2 調査項目	P 3
3 アンケート結果	
回答者属性	P 5
海外派遣を経験して	P 6
ホームステイについて	P11
協力についての意向	P11
4 派遣生インタビュー	
平成 19 年度 ドイツ・オッフエンバッハ市派遣生	P13
平成 20 年度 フランス・オータン市派遣生	P14
平成 23 年度 アメリカ・セーレム市派遣生	P15

1. 調査概要

① 調査目的

昭和62年に開始した「海外姉妹都市訪問川越市中学生交流団派遣事業」は、令和2年において33年が経過した。これを機に、派遣生にアンケート調査を実施し、本事業が与えた影響や効果を調査し、今後の活動に活かすものとする。

② 実施期間

令和2年11月10日（火）～令和2年12月31日（木）

③ 調査対象

昭和62年度～平成27年度海外姉妹都市訪問中学生交流団派遣生 440名

※本調査では令和2年度に成人を迎えている派遣生を対象とする。

④ 調査方法

(1) アンケート調査実施についての通知を対象者へ郵送。

※住所や氏が変更している可能性があるが、派遣当時の住所へ送付。

(2) 対象者はQRコードを読み取り、電子申請にて回答。

(3) 回答を集計し、報告書を作成。

⑤ 回答結果

対 象	配布数	回答数	回収率
セーレム市訪問中学生交流団派遣生 昭和62年度（第1回）～平成27年度（第14回）	231 (44)	75	33%
オッフエンバッハ市訪問中学生交流団派遣生 平成6年度（第1回）～平成26年度（第10回）	198 (31)	78	40%
オータン市訪問中学生交流団派遣生 平成20年度（第1回）	11 (0)	5	45%
合 計	440 (75)	158	36%

※()内は、配布数のうち郵送戻り数。

2. 調査項目

内容	No	項目	回答		
回答者属性	1	あなたのお名前を教えてください。	お名前	ふりがな	旧姓
	2	ご年齢を教えてください。	①19～29歳	②30～39歳	③40～49歳
	3	現在のご職業を教えてください。	①学生	②会社員	③公務員
			④パート・派遣社員	⑤無職	⑥専業主婦（主夫）
			⑦自営業	⑧会社役員・経営者	⑨その他（ ）
海外派遣を 経験して	4	派遣都市をお選びください。	①オッフェンバッハ市 （ドイツ）	②セーレム市 （アメリカ）	③オータン市 （フランス）
	5	派遣事業に参加していかがでしたか。	①大変良かった	②良かった	③どちらでもない
			④あまり良くなかった	⑤良くなかった	
	6	問5で回答したように感じる理由を教えてください。	自由記述		
	7	派遣事業への参加は、その後の生活や職業・進路の選択等に影響を与えましたか。	①大いにあった	②多少あった	③あまりなかった
			④全くなかった		
	8	派遣事業への参加後、海外へ留学された方は、具体的な留学先等を教えてください。	自由記述		
	9	海外派遣の経験を生かした仕事をしている方は、具体的な仕事内容等を教えてください。	自由記述		
10	海外派遣事業について今後の発展のためのご意見や後輩へのメッセージをお願いします。	自由記述			
ホームステイ について	11	ホームステイを体験していかがでしたか。	①大変良かった	②良かった	③どちらでもない
			④あまり良くなかった	⑤良くなかった	
	12	現在もホストファミリーや現地の方々との交流は継続していますか。	①継続している	②継続していない	
協力について の意向	13	今後、姉妹都市交流に関する式典等で派遣事業の体験談を話したり、インタビューを受ける機会等があれば、ご協力をいただけますか。	①協力できる	②協力できない	
	14	問13で①と回答した方はご連絡先を教えてください。 （電話番号やメールアドレス等）	自由記述		

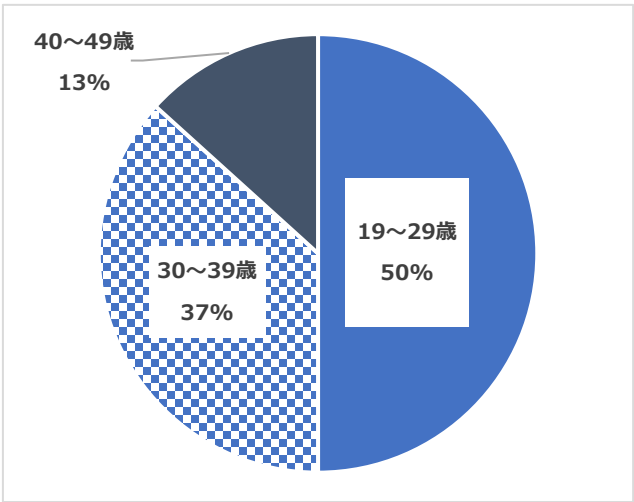
アンケート結果

3. アンケート結果

回答者属性

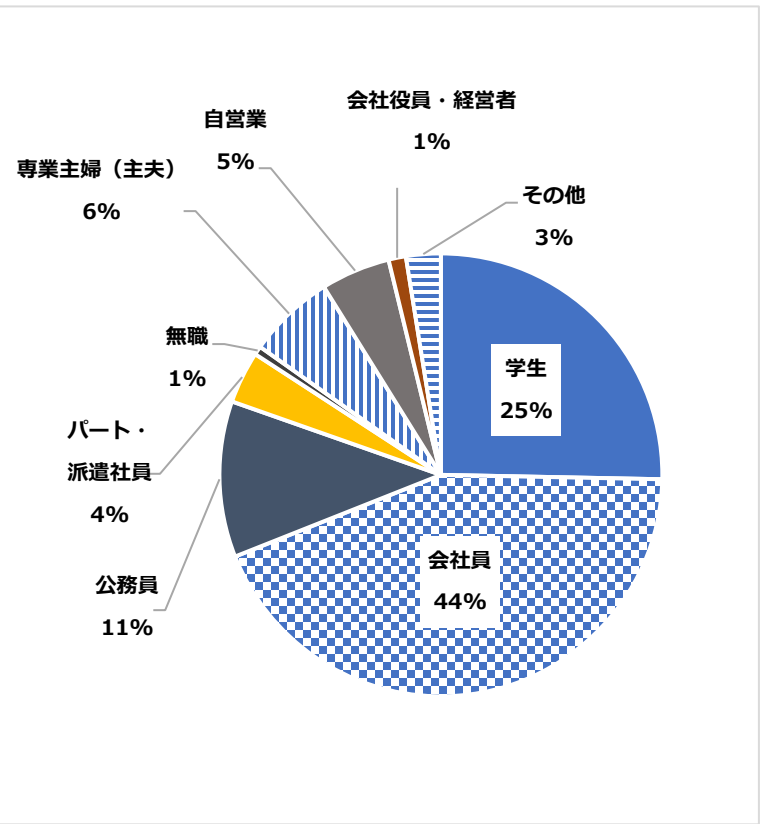
【問2】ご年齢を教えてください。

回答		人数	割合
1	19～29歳	79	50%
2	30～39歳	58	37%
3	40～49歳	21	13%



【問3】現在のご職業を教えてください。

回答		人数	割合
1	学生	40	25%
2	会社員	69	44%
3	公務員	18	11%
4	パート・派遣社員	6	4%
5	無職	1	1%
6	専業主婦（主夫）	10	6%
7	自営業	8	5%
8	会社役員・経営者	2	1%
9	その他	4	3%

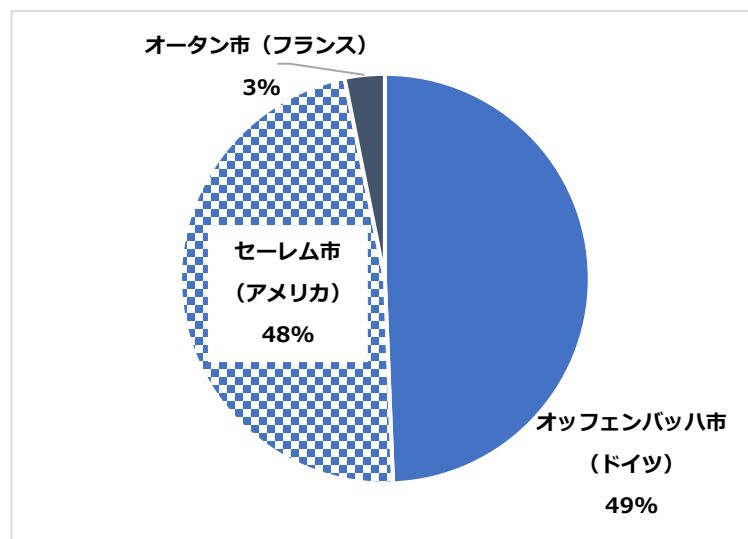


「会社員」が44%で最多。また、25歳以下の回答者が一定数を占めているため、全体の4分の1が「学生」となった。なお、「その他」の回答は、看護師2、研究員1、通訳者1。

海外派遣を経験して

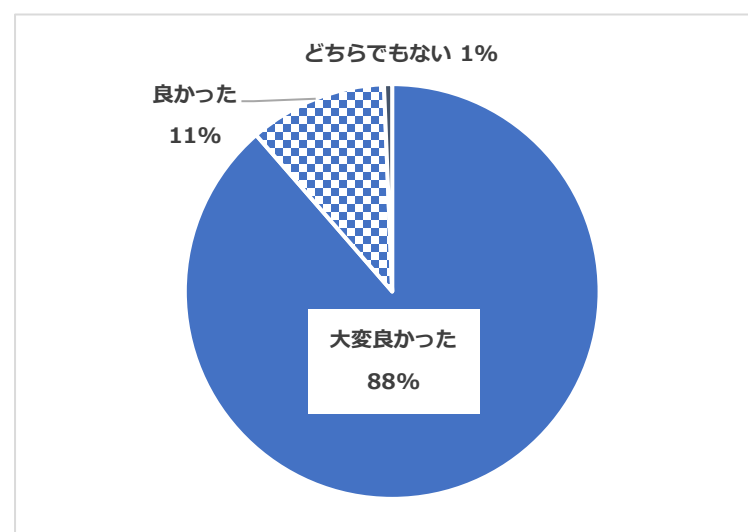
【問4】派遣都市はどこですか。

	回答	人数	割合
1	オフエンバッハ市（ドイツ）	78	49%
2	セーレム市（アメリカ）	75	48%
3	オータン市（フランス）	5	3%



【問5】派遣事業に参加していかがでしたか。

	回答	人数	割合
1	大変良かった	140	88%
2	良かった	17	11%
3	どちらでもない	1	1%
4	あまり良くなかった	0	0%
5	良くなかった	0	0%



「大変良かった」「良かった」の割合が99%となり、派遣生の満足度が大変高いことが分かる。

【問6】上記のように回答した理由を教えてください。（一部抜粋・原文ママ）

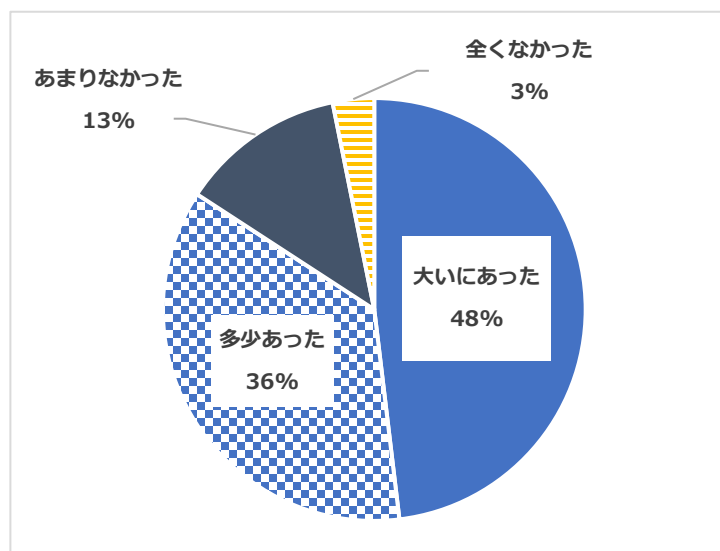
1	私にとって初めての海外渡航であったが、ホストファミリーとの出会いをはじめ、姉妹都市との交流は新鮮であり、その後の人生に大きな影響を与えたと思う。実際、海外旅行が現在の趣味となり、東南アジアの国々など多くの国を訪れた。また次回アメリカに行く際はぜひセーレムに行きたいと考えている。他にもニュースを見るときなどにセーレムのニュースがあれば特に気にして見るなど私にとって川越に次ぐ身近な地域である。
2	派遣事業は私にとって初めての海外でした。参加前はかなり英語が苦手だったことから海外に全く興味がなく、将来も日本国内から出るつもりはないと考えていました。そんな考えが180度変わり、海外にもっと行きたいと思うようになり、今では英語を用いて海外と関わる仕事までしています。今に至るまでの転機は色々となりましたが、人生において価値観の変わる大きな一歩は間違いなくこの派遣事業でした。
3	若く多感な時期に、今まで見たことない世界に飛び込み実際に異文化を体験するという機会は滅多になく、大きな刺激を受けたことを15年以上経った今でも鮮明に覚えています。英語教育という観点だけでなく、異文化理解という側面も強く、グローバルな現代において求められる思考やダイバーシティへの理解を促進出来る素晴らしいプログラムだと思います。また、プログラムと一緒に参加したメンバーとは今でも交流があります。
4	ずっと興味があった海外だったが、親の承諾が得られなかった。この交流事業への参加で初めて親にも認めてもらえて、ここから私の海外志向が高まった。海外に目を向けることで視野も広がり、多角的な視点の素地となる経験だった。現在では、本業の傍らワーホリ準備中の方々への講座講師をしたり、ニューヨークの会社に対してリモートで仕事のお手伝いができるくらい活動の場が広がった。

5	オータン市に派遣していただいた際に触れ合った学生やホストファミリーが素晴らしく今でも連絡をとっています。これにより、フランス語やフランス文化、フランス文学に関心を持ち、勉強するきっかけとなりました。そして今の職でもフランス語を使用しております。この派遣事業のおかげです。
6	多感な時期に世界を見せていただいたこと、他国の文化に触れ、そこに住む人々と出会い生活を共にさせてもらう事、その全てに意味があり興味が生まれ人として多くの成長を学ばせて頂けたことに今でも感謝しています。そしてその人生経験を共にした他校の生徒との交流も20年以上経った今でも大切な宝物です。
7	一週間の滞在でしたか鮮明に覚えています。事前の講習会、そして初の海外、また数年後セーレムのご一行が川越祭りに来てくれた際に偶然お会いすることもでき、繋がりを感じました。中学生の幼い私が海外に初めて触れ、大きな刺激を受けました。その後大学では国際関係の学部を専攻し、カナダ短期留学、フィリピン井戸掘り活動、そして旅行会社に就職しました。全てはセーレム訪問がきっかけです。感謝いっぱいです。
8	当時川越の中学生に海外は特別なものでしたが、いずれボーダレスに活躍する人材になりたいと願っており、始めの一歩だったかもしれません。大学時代には課外活動の資格取得で豪州に短期滞在したり、その後も折に触れ公私で海外をそこそこ身近に生活しています。あの経験が全てではないが、人生の豊かさの一部、礎になっているのではないかと考えています。
9	初めての海外経験でした。当時、英語が得意科目であった私ですが、この経験を通し、まだまだ学ぶべきことがたくさんあることを思い知らされました。また、他校の生徒同士で交流し、お互い切磋琢磨することができました。いまは公立中学校で英語教師として働いていますが、この経験があったからいまもこうして英語が好きで、子供たちに英語の楽しさや国際理解について本気で伝えられているのだと確信しております。
10	旅行とは異なり、現地で暮らす人々の生活を一緒に体験できたことがすごく嬉しく、また貴重な経験で、今でも鮮明に思い出せるくらい印象的な出来事でした。英語は少ししか話せなかったけれど、習いたての単語で一生懸命コミュニケーションを取り、通じた時はすごく嬉しかったことも覚えています。将来は英語を使ってより多くの人と話せるようになりたいと強く思った、良いきっかけとなりました。
11	オッフェンバッハ市訪問が、人生で初めての海外でした。日本と違う文化に触れたり、言葉を学んだり、現地の人と関わって過ごしたり、本当に楽しかったことを覚えています。まだ拙い英語とドイツ語を使おうとしながら、ジェスチャーと共に自分が思うことを全力で伝えようとして、それが伝わった時の嬉しさ、忘れません。本当に素敵な体験でした。
12	私にとって初めての海外であり、みるもの全てが新しく世界の広さを感じる体験でした。当時、恥ずかしながら英語の成績が良いと自負していたのですが、現地で英語が通じなかったことが、その後英語を学びたいという大きなきっかけとなりました。事業で出会った仲間やホストファミリーも今でも連絡するなど交流がありとても大切な宝物です。川越市が築いてきた姉妹都市交流が教育につながっていると感じております。
13	生まれて初めての海外旅行でした。たくさんの刺激を受けました。中学生の時には気がつかなかったことも、大人になるにつれて、振り返ってはあれこれと思い巡らせ、遠い記憶ではありますが、今でも心の栄養になっております。
14	20年も前の事ですが、綺麗なドイツの景色や、ホームステイ先のご家族の事など、今でも良く覚えており、あの年齢でとても貴重な経験をさせて頂いたと思っています。 この経験は、私の人生の中でも、とても大きな出来事で、その後、色々な事に積極的に取り組めるようになったのも、このおかげだと思っています。自分の子供たちにも、同じような経験をさせてあげたいな、と思います。

【問7】派遣事業への参加は、その後の生活や就職・進路の選択等に影響を与えましたか。

回答		人数	割合
1	大いにあった	76	48%
2	多少あった	57	36%
3	あまりなかった	20	13%
4	全くなかった	5	3%

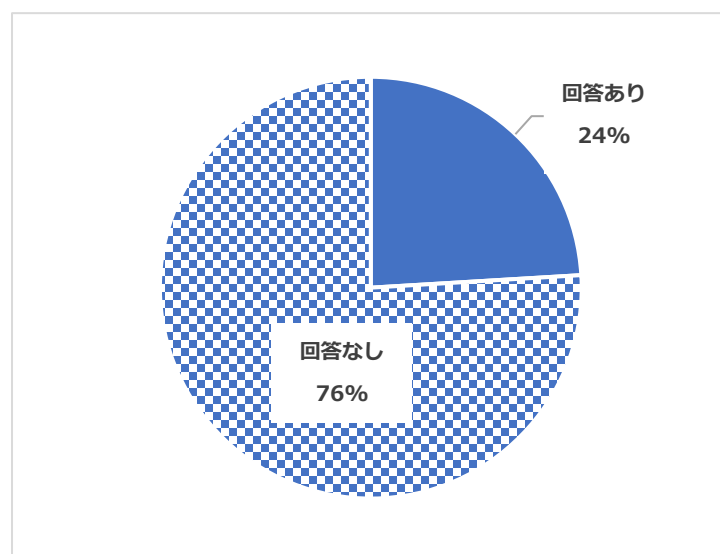
「大いにあった」「多少あった」の割合が84%となり、本事業が派遣生のその後の生活等に影響を与えていることが分かる。



【問8】派遣事業への参加後、海外へ留学された方は、具体的な留学先等を教えてください。

回答		人数	割合
1	回答あり	38	24%
2	回答なし	120	76%

2割以上の派遣生が、海外で学んだ経験がある。
回答内容の詳細は次ページを参照。



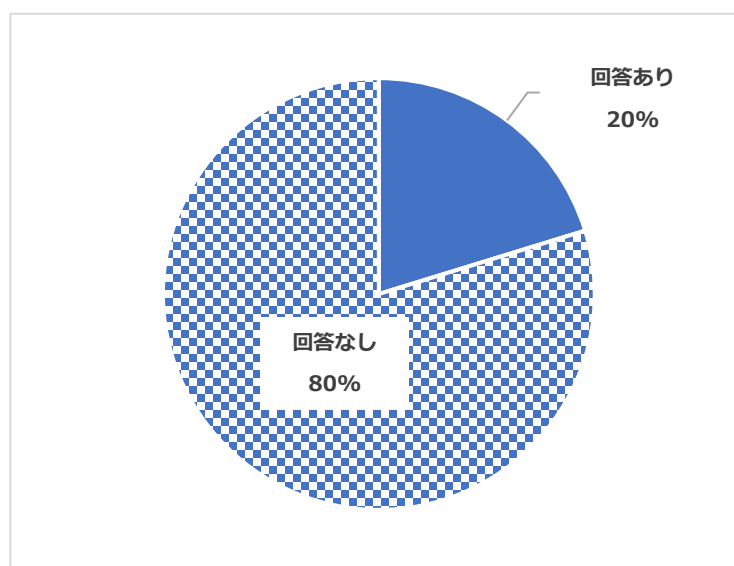
【渡航先（抜粋）】

アメリカ／カナダ／イギリス／メキシコ
オーストラリア／ニュージーランド
イタリア／ドイツ／フランス／チェコ共和国
タイ／マレーシア／フィリピン／インドネシア
カンボジア／スリランカ／中国／韓国

【問9】海外派遣の経験を活かした仕事をしている方は、具体的な仕事内容等を教えてください。

回答		人数	割合
1	回答あり	32	20%
2	回答なし	126	80%

2割の派遣生が、経験を活かした仕事をしている。
回答内容の詳細は次ページを参照。



【仕事内容（抜粋）】

外資系企業／旅行会社／海外ベンチャー企業
商社／海外駐在員／輸入販売／通訳者
翻訳者／客室乗務員／空港職員／英語教員
英会話講師／NPO法人／研究員
ツアーコンダクター／開発コンサルタント

【問8】派遣事業への参加後、海外へ留学された方は、具体的な留学先等を教えてください。

【問9】海外派遣の経験を生かした仕事をしている方は、具体的な仕事内容等を教えてください。

(問8、問9ともに一部抜粋・原文ママ)

No.	問8	問9
1	大学生の頃にオーストリアのウィーン大学で1年間の交換留学を経験。その後、ドイツのベルリン自由大学で政治学修士号を取得。	大学卒業後に外務省へ入省。現在は在ミュンヘン日本総領事館にて姉妹都市関係を含む南ドイツにおける日独交流を担当しています。
2	留学ではありませんが、日本語教師のアシスタントボランティアとしてオーストラリアに1ヶ月、ボランティアインターンとしてマレーシアに6ヶ月滞在しました。現在も仕事で年間通算4ヶ月は海外へ渡航しています。	主に大学生を中心とした海外ボランティアプログラムを通じて、東南アジアの子どもたちを支援するNPOに勤務しています。事業地であるフィリピン、マレーシア、ミャンマーへは年間計4ヶ月滞在します。
3	アメリカのUCLA等に留学のための視察に数ヶ月、ドイツ・ゲッティンゲン大学に3年、ドイツ・マールブルグ大学に4年	国際連合教育科学文化機関本部自然科学部で野生生物保護関係で数年勤務。英国の環境コンサルティング会社日本社で日本の環境省の政策支援等で4年勤務。2010年ケニアで起業しアフリカ15カ国で環境事業を実施。
4	2013年から14年までカンボジアにて出版関係のインターンシップを経験	海外の日本語フリーペーパーのエディトリアルデザイナー
5	高校生在学時にブラジルに一年間、大学ではフランスに一年間留学しました。	海外派遣を通して学んだグローバルな視野と経験が礎となり、様々な海外でのインフラ事業(ブラジル/インドでの鉄道建設、途上国のモバイル通信敷設)に携わっています。
6	カリフォルニア大学バークレー校学士課程政治経済学部卒業	IT企業にて、社内外国人インターン生の現場統括責任者。米国大学編入支援企業を共同創業し運営中。
7	英語以外の外国語を学びたく、東京外国語大学に入学し、チェコ語を専攻。チェコ共和国のカレル大学に1年間留学し、主に中東欧諸国の知見を深める。	外資系IT企業の日本支社でマーケティングの仕事に従事。メールやウェブ会議では英語によるコミュニケーションが中心で、コロナ以前は本社のアメリカやアジア諸国への出張の機会も多かった。
8	高校生の時にアメリカにホームステイ、その後、日本の大学を経て、イギリスの大学院で修士過程を修了しました。	現在、米国で産業技術に関わる研究機関で働いています。
9	ハイデルベルク大学	ドイツに本社があるコンチネンタルという企業の日本法人で働いています。
10	高校在学中に、フランスのボルドーの現地の高校へ1年間留学した。その後、大学在学中にイタリアのフィレンツェへ2年間留学した。	現在は日本学術振興会の特別研究員としてフランス文学を研究する傍ら、日仏伊通訳・翻訳者として仕事をしています。また、高校でもフランス語を教えており、後身の育成にも力を入れています。

【問10】 海外派遣事業について今後の発展のためにご意見や後輩へのメッセージをお願いします。

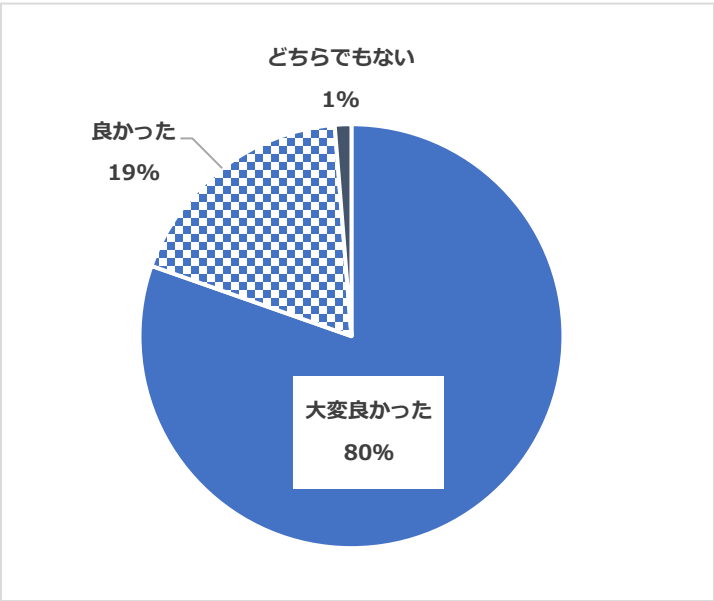
1	オンラインはオンラインとしての良さがあり、瞬時に世界中と繋がることのできるメリットは大変大きいと感じます。しかし、事前にその国や地方のことをよく調べ、時間をかけて現地へ趣き、文化的背景の異なる相手と生でコミュニケーションをとる経験は本当に貴重です。ご担当の皆様はご苦労も多いことと思いますが、機会を頂き大変感謝しております。暫くは渡航が難しい状況が続きますが、ぜひ本事業は継続して頂きたいと思います。
2	もう10年前の話になりますが、今でもオフエンバッハでの交流のことはいくつも覚えています。全く異なる街での暮らし、美しい街並みに心を奪われたこと。あまり話せず悔しい思いをしたこと。言葉が流暢に通じない中でも一生懸命伝えようとしたことは、今の勉強や仕事にも繋がることです。市のサポートと様々な機会は、交流事業だからこそ得られる経験だと思います。是非、興味や好奇心の一步を踏み出してほしいです。
3	今思えば派遣事業を通して、国や国籍、言葉が違うけども、同じ人間が同じ時を生きているという、当たり前のようで日々の生活では感じにくいことを一番実感できていたのだと思います。グローバル化が進む今、国籍を超えた世界の人々と関わるのは当たり前で、その中でどう共生するかが問われています。派遣事業はまさにそれを考え、実践する第一歩です。ぜひこの機会を有意義に用い、今後の人生に生かしてほしいです。
4	行けない場所もVRや4DXなど様々な映像技術で体感できる時代ですが、大陸を超えて実際に肌で感じる空気感には、言葉にできない、語りつくせない何かがあります。私は当時自分の中に感じていた息苦しさ・生きづらさ・不自由さから、自分を解放する窓や扉を見つけたような大きな収穫がありました。また、世界の素晴らしさ、故郷の素晴らしさに気づく貴重な機会です。五感を大いに使って、全身で感じ楽しみ、学んできてください。
5	今後もぜひ続けて頂きたいです。私はホストファミリーとの交流が今でも続いています。ホストの両親とシスターが、何度も日本にきてくれ、家に泊まったり一緒に日本観光をしたり、家族としての交流をしています。またその経験から、世界各国を訪れたい、自分の目で見て経験したい、という気持ちが生まれ、15カ国以上の国を訪れ世界観を広げ続けています。海外派遣事業をきっかけに世界に羽ばたく人材を育成し続けて欲しいです。
6	様々な世界情勢により海外派遣事業がとても難しいことは理解していますが、川越市の子供たちのためにできる限り続けていってほしいと感じています。現在私は海外留学中なのですが、その前は中学校で働いていました。現在どのように学生に募集をかけているかわかりませんがお金もかかり受験期でもあるので各校一名を出すのは生徒と教員の負担になる場合もあるようです。川越市で何人、と募集をかけ、選考しても良いかと思います。
7	広告マーケティングの会社に勤務しておりますが、新卒時にはドメスティックの代表のような会社が今や海外企業を買収し全世界に数万人の従業員がいます。隔世の感です。1週間の派遣事業が人生にドラマティックな変化をもたらすとは思いませんが、全てがボーダレスな社会ですので、若い方に異国を日常の視点で捉えるチャンスを一層拡大頂きたいと切に願います。私は与えていただいた機会に感謝しています。
8	交流することは、人生において大切なことだと思います。このプログラムでは、同じ市内の同級生や、引率の先生、また関係者など、たくさんの人達と団で活動ができます。もちろん、現地でもたくさんの出会いがあります。好奇心旺盛で、多様性をスポンジの様に吸収できる中学3年生という年齢でこのような経験ができることは本当に貴重なことです。心配なことはありません、少しでも興味があれば、ぜひ挑戦してみてください。
9	参加者には事前に海外派遣事業の意義や目的をしっかり理解させて、単なる旅行では無いということを叩き込む必要があると思います。もしかしたら、中学生を派遣するのはあまり意味がないのかもと思います。（私と一緒にいった仲間もドメスティックな仕事に従事しています。）
10	現在はわかりませんが、私の時は生徒会の生徒の参加が多かったように思います。その枠組みに囚われず、少しでも興味のある生徒にチャンスがあれば良いと思いました。

ホームステイについて

【問11】 ホームステイを体験していかがでしたか。

回答		人数	割合
1	大変良かった	127	80%
2	良かった	29	19%
3	どちらでもない	2	1%
4	あまり良くなかった	0	0%
5	良くなかった	0	0%

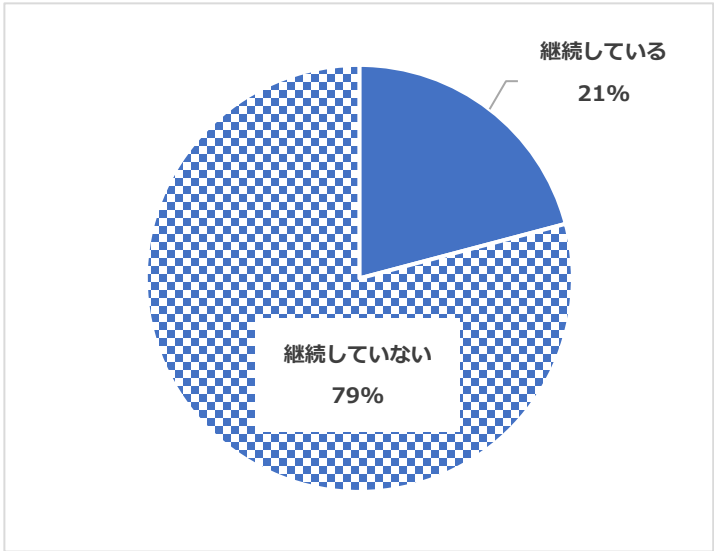
「大変良かった」「良かった」の割合が99%となり、ホームステイの体験が派遣生にとって充実したものであったことが分かる。



【問12】 現在もホストファミリーや現地の方々との交流は継続していますか。

回答		人数	割合
1	継続している	33	21%
2	継続していない	125	79%

「継続していない」と答えた派遣生が約8割となり、関係を維持するのは難しいことが分かる。一方で、中学卒業後も約2割が交流を続けており、なかには30年以上に渡って友好関係を継続している派遣生もいる。

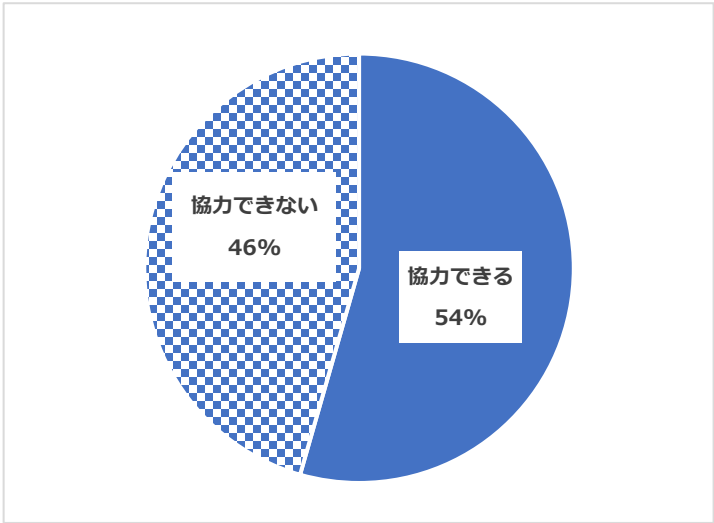


協力についての意向

【問13】 今後、姉妹都市交流に関する式典等で派遣事業の体験談を話したり、インタビューを受ける機会等があれば、ご協力をいただけますか。

回答		人数	割合
1	協力できる	86	54%
2	協力できない	72	46%

回答者の半数以上が「協力できる」と答えている。



派遣生インタビュー

平成 19 年度 ドイツ・オッフエンバッハ市派遣 殿村 さおり さん
(外務省・在ミュンヘン日本総領事館 副領事)

Q 中学生でオッフエンバッハ市に行かれた時の様子を教えてください。

それまで親と一週間も離れてどこかに滞在することはなかったので、楽しみ半分、不安半分という感じでした。また、初めての海外だったのでとにかく見るもの全てが新鮮でした。当時撮った写真を見返してみたのですが、「どうしてこんな写真撮ったんだろう・・・」と思うような何てことない写真がたくさんあって（笑）。

言葉の壁も感じました。ホストファミリーとの会話は英語だったのですが、当時の英語力では言いたいことが言えず、とてももどかしい思いをした記憶があります。



オッフエンバッハ市にて
ホストファミリーと

Q どのような進路に進まれたのですか。

高校は普通科に進みましたが、交流団での経験からドイツ語を学びたいという思いがあり、大学はドイツ語の勉強を含め、幅広く学ぶことができる東京外国語大学に進みました。大学では交換留学生としてオーストリアに1年間滞在し、その間ドイツにも行きました。卒業後は外務省に入省し、ベルリンでの2年間の留学を経て、入省4年目から在ミュンヘン日本総領事館に勤務しています。

Q 現在はどのような仕事をされていますか。

総領事館で政務、広報、文化事業を担当しています。現在はコロナ危機により対面の文化事業ができないので、主に情報の収集や発信、ソーシャルメディアを利用した広報を行っています。ドイツは州ごとに新型コロナウイルス対策のルールが違うので、管轄するバイエルン州・バーデン＝ヴュルテンベルク州の政策を確認して在留邦人のみなさんに領事メールでお知らせするほか、総領事館のFacebook ページを通じて日本について南ドイツの皆さんに広く発信するなどしています。自分が集めた情報が在留邦人の方や、日本に関心のあるドイツ人の助けになれば嬉しいです。



日独交流イベントでの通訳

Q ドイツに暮らして感じたことはありますか。

今年の夏でドイツ勤務も4年になりますが、中学生交流団としてドイツ語が全くできない状態で1週間だけ滞在したときとは異なり、ドイツの文化や社会制度、人々の暮らしについて様々な側面を知ることができました。また、大学時代の出会いも含めて多くの大切な友人もあり、今ではドイツは人生から切り離すことのできない場所です。交流団でオッフエンバッハを訪れていなければ、ドイツに興味を持つことも、ドイツ語を学ぶこともなかったと思うので、当時の経験がこうして現在の仕事につながっていることを大変ありがたく思っています。

平成 20 年度 フランス・オータン市派遣 石井 咲 さん
(日本学術振興会特別研究員/ 日仏伊通訳・翻訳者 / フランス語教師)

Q 中学生でオータン市に行かれて、何か変化はありましたか。

以前から英語には興味があったのですが、帰国後は完全にフランス語へと興味が移り、受験期でしたがテキストを買ってすぐに独学で勉強を始めました。常に「人とは違うこと」を学びたいと思っていたので、自分にとっては中学校内で誰も勉強していないフランス語を学ぶことは刺激的でした。

高校は第二外国語としてフランス語が学べる学校を受験し、外国語科に進みました。高校在学中にフランスへ留学することを希望していたため、1年生の時から準備を始め、2年生の夏からボルドー市の公立高校に1年間留学をしました。日本人は1人もおらず大変な事も多かったですが、とても楽しかったですね。中学生交流団でお世話になったホストファミリーや当時現地でできた友達とは、今でも連絡をとって交流を続けています。高校在学中も2度オータン市に行き、ホストファミリーの家に泊まったりしました。



オータン市にてホストファミリーと再会

Q イタリア語の仕事もされていますね。

大学ではフランス文学を専攻していましたが、第4外国語として学んでいたイタリア語にも興味を抱き、在学中に2年間イタリアに留学しました。フランス語と言語体系が似ているので、あまり抵抗なくスタートできたと思います。上達のために日々の勉強は欠かせませんが、語学は自分の好きなことなので続けられています。

Q 外国語の習得は大変なイメージがありますが・・・

外国語の学習に終わりはないため、確かに大変でつらいことかもしれません。例えば、文法を覚え、テストで良い点が取れても、実際に現地に行って会話をしてみると、自分が想定していない方向に話が進んだり、なかなか教科書通りにはいきません。しかし、コミュニケーションの取り方に正解がないということは、裏を返せばどんな回答をしても良いということでもあります。大事なのは、話してみた際に「何を理解できなかったか」、「何を伝えられなかったか」といったことを自分で考え、悔しい思いをしつつも分析することです。私も何度も悔しい思いをしてきました。また、各言語の中には音楽と同じように固有のリズムというものがあります。私は学べば学ぶほどその言語のリズムが身体に馴染んで、歌っているのが楽しいと感じるように、喋っているのが楽しいと感じますね。



初めて出版した翻訳書とともに

Q 中学生に向けてメッセージをお願いします。

大人になった今では世界は日本の外に広がっていて、外国を訪れ、生活することで新たな知見や価値観を得られることを知っています。でも、中学生のうちは中学校という限定された社会しか知らないため、逃げ場がないように感じ、人間関係や受験勉強など様々なことで毎日悩んでいるかもしれません。私たちがオータン市へ行った際も、派遣生はそれぞれ悩みを抱えていましたが、日本の外に広がる世界を経験して、「小さな悩みだったね。」などと言い合って帰国したのを覚えています。海外に行くというのはある意味「冒険」です。外の世界を知ることで、自分をとりまく環境を振り返り、考え直す機会にもなります。今後、海外に行く機会があったらぜひ一歩踏み出してほしいです。私のように進路ががらっと変わることだってありますからね！

平成 23 年度 アメリカ・セーレム市派遣 安田 耕大 さん
(株式会社 Tricon (留学支援企業) 副代表)

Q 最初にアメリカに行きたい！と思ったきっかけは何ですか。

中学生時代、孫正義さん（ソフトバンクグループ創業者）の人生を描いた『志高く』という書籍に大きな衝撃を受け、「自分も孫さんのような生き方をしてみたい！」と本気で思いました。孫さんは日本の高校を卒業後、アメリカの西海岸にあるカリフォルニア大学バークレー校（UC バークレー）に進学されたのですが、私もアメリカに渡った彼に少しでも近づきたいと思って、迷わずアメリカ・セーレム市への派遣に手を挙げました。海外派遣といっても、アメリカ以外の国・地域であれば関心が無かったでしょうから、アメリカ派遣に参加できたのは、本当に運が良かったと思います。

Q 中学 3 年生での初めてのアメリカ行きはいかがでしたか。

セーレム市での体験を通して、アメリカという国や海外での生活に親しみを持てるようになりました。また、海外留学への思いがさらに強くなりました。高校に進学してから、友人の多くが日本国内の大学への進学を希望する中で、UC バークレーへの進学やアメリカ行きを希望する私は珍しい存在だったように思います。



高校の後輩が UC バークレーを訪問

Q 高校卒業後は、念願どおり UC バークレーへ進学されましたね。

“UC バークレーへ行きたい！”という私の思いを、両親や高校の先生たちも、はじめはあまり真に受けていませんでした。それでも、私がずっと本気で言い続けていたら、最後はアメリカ行きを後押ししてくれました。

高校卒業後はアメリカのコミュニティカレッジなどで学んだ後、UC バークレーに入学しました。アメリカでの生活は言葉や文化の違いなどもあって苦労の連続でしたが、孫さんのビジネスパートナーであった UC バークレーのフォレスト・モーザー博士と直接お会いできる機会にも恵まれました。また、アメリカの大学への進学を支援する企業とともに経営する仲間にも恵まれました。孫さんに憧れて進学した UC バークレーでしたが、今では自分自身の強みや個性を存分に発揮し、「孫正義を追う青年」ではなく「安田 耕大」として社会に貢献していきたいという思いが強いです。孫さんとは違った自分なりの視点や切り口から社会課題と向き合い、企業経営を通じて、より良い社会を創っていきたいですね。



米国でのビジネスのプレゼンテーション

Q 中学生に向けてメッセージをお願いします。

この記事を読んでいる方の中には、学校生活に息苦しさをを感じている方もいるかもしれません。私も学生時代、周囲との個性などの違いに悩んだ時期もありました。それでも、私が自信をもって言えるのは、「後悔しない選択肢」を選び続けてきたということです。自分の未来や進路を考える時は、今ある周囲の環境だけに目を向けるのではなく、「将来後悔しないポイントはどこだろう」という点にも目を向けてみてください。自分の気持ちを整理しやすくなると思いますよ。

留学を通して得た学びの 1 つでもあるのですが、自らアクションを起こして何か新たな経験をすると、自分の中に「新しい視点」が生まれてきます。そして、これまで自分が見ていたモノ、考えていたコトに対して新たな発見が生まれます。悩んだり、苦しんだりした経験も後になって振り返ると、自分の糧になっているなど感じる事が多々あります。それに気づくまでは辛いけれど、その辛い思いをすることで、相手の気持ちが分かることもあるし、その思いに自分がどう対処していくか、考える機会にもなるはず。後悔しないように自分の気持ちに素直に行動してみましょう！

海外姉妹都市訪問川越市中学生交流団

派遣生アンケート調査報告書

発行／令和 3 年 6 月

編集／川越市国際文化交流課

〒350-8601 川越市元町 1 丁目 3 番地 1

Tel 049-224-5506

kokusaikoryu@city.kawagoe.saitama.jp